

自然教育資源としてのゼニガタアザラシ

— 1987年ウォッチングツアーについて —

中岡利泰¹・永田耕一¹・石川慎也²・池上洋子³

1. 080 帯広市稲田町 帯広畜産大学畜産環境学科
3. 080 帯広市稲田町 帯広畜産大学家畜生産科学科

2. 080 帯広市稲田町 帯広畜産大学畜産経営学科
(1-3: ゼニガタアザラシ研究グループ)

はじめに

ゼニガタアザラシ (*Phoca vitulina stejnegeri*) は北太平洋沿岸に広く分布する *Phoca vitulina* の一亜種とされている (Shaughnessy and Fay, 1977)。

日本における分布は北海道東部沿岸に限られ、現在6ヶ所の繁殖場が確認されている。1973年以来毎年実施されている生息数調査により、1987年現在の推定生息数は約380頭である (ゼニガタアザラシ研究グループ, 1987)。

生息数調査開始当初、生息確認数はわずか200頭ほどであった。このため、ゼニガタアザラシの絶滅を危惧した哺乳類研究グループ (現、日本哺乳類学会) 海獣談話会は、1973年、本種の天然記念物化運動を開始した。その結果、1974年12月文化財保護審議会はゼニガタアザラシを天然記念物に指定するよう文部大臣に答申した。しかし、本種の生息する地域の漁業協同組合など地元関係団体から、天然記念物化に対するいくつかの条件が提出されたため告示されなかった。当時この諸条件について、文化庁・海獣談話会・地元関係団体の間で十分な意見調整がなされたとはいえない。その後も行政の積極的対応はなされず、ゼニガタアザラシは1988年2月現在、未だ日本の法体系 (文化財保護法・水産資源保護法・鳥獣保護法など) における保護はなされていない。ゼニガタアザラシの生態・保護運動の経過については「ゼニガタアザラシの生態と保護」(東海大学出版会、1986) に詳しいので参照していただきたい。

現在の天然記念物制度では、たとえ指定されたとしても適切な保護管理がなされるわけではない。これはニホンカモシカの例を見ても明らかである。

狭い国土と高い人口密度を持つ日本において、人間と野生動物が共存していくためには、適切な保護管理体制の確立と実施が不可欠である。そのためには、対象動物の種および生息地の法的保護はもとより、個体数、出生率などの生物学的情報や、地域住民および一般大衆の理解と協力が必要である。しかし、具体的な保護管理をおこなう場合、第一次産業との摩擦がクローズアップされる。鯨脚類の場合は漁業被害など、漁業との関係が問題となる。

ゼニガタアザラシは限られた上陸場に生息するため、保護管理に必要な情報が得られやすい (羽山, 1985)。われわれは、生息数調査、各種生態調査等により生物学的情報を蓄積するとともに、漁業被害調査をおこない、そのメカニズムを明らかにしてきた (和田ら, 1986)。また、ゼニガタアザラシの保護管理に対する理解と協力を得るため、地元住民との懇談会・観察会をおこなってきた (ゼニガタアザラシ研究グループ, 1986, 1987)。われわれは、日本で唯一繁殖する鯨脚類であるゼニガタアザラシの保護管理を一地方のみの問題としてではなく、全国的な視野にたち、自然教育資源の一つとしてとらえたいと考えている。

近年、自然教育の必要性が高まり、各地で様々な観察会が実施されている。自然教育の目的は正しい自然の認識、自然観の形成にあるといわれている (青柳, 1982)。自然教育の目的が達成されるならば、自然教育をとおして野生動物と人間の共存の道は開けるであろう。

今回われわれは、①ゼニガタアザラシの生物学的情報、②漁業被害に代表される人間とアザラシの間に生じるトラブル、③アザラシの生息する地

域の自然環境と人々の営み、という三項目を自然教育資源として活用するため“ゼニガタアザラシウォッチングツアー”を企画実施した。

ゼニガタアザラシウォッチングツアーの実施

ゼニガタアザラシウォッチングツアー（以下ツアーと略す）は、下記のとおり実施された。

〔共催〕 日本自然保護協会（募集、会計担当）
ゼニガタアザラシ研究グループ
（企画、実施担当）

〔後援〕 えりも町商工会観光協会
えりも岬観光青年クラブ
えりも岬漁業協同組合青年部
ひがし大雪博物館
シーサイドパーク広尾水族館
然別湖の自然を考える会

〔日程〕 1987年9月13日から15日まで

9月13日

10:30 東京羽田空港集合
13:10 帯広空港着、バスにて移動
15:30 シーサイドパーク広尾着
飼育下のアザラシ観察
17:00 えりも岬着、ゼニガタアザラシ観察
18:00 えりも岬宿舎着（入浴・夕食）
20:00 えりも岬地元住民との懇談会
“ゼニガタアザラシの生態と保護”
のスライド上映
●漁師銅谷さんの講演
●親睦会

9月14日

6:00 サケの水揚げ見学
7:00 朝食
9:00 えりも岬、ゼニガタアザラシ観察
10:30 えりも岬出発
12:30 豊似湖着、自然散索、昼食
13:30 豊似湖出発
18:30 然別湖宿舎着（入浴・夕食）
20:30 ひがし大雪博物館学芸員川辺百樹氏の講演
21:30 ナイトウォッチング出発
24:00 宿舎着

9月15日

6:00 ナキウサギ観察会（朝食）
9:00 観察会終了

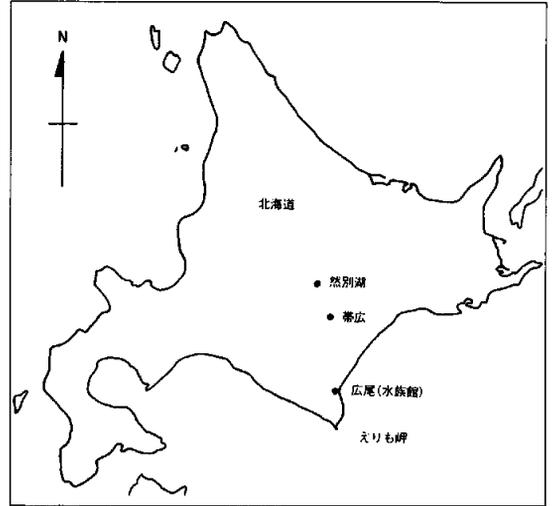


図1. えりも岬の位置

10:30 然別湖出発
12:20 帯広空港着
14:30 東京羽田空港着 解散

〔参加募集〕 日本自然保護協会の機関紙“自然保護”7月号、および一部の雑誌・新聞に広報した。

〔参加者数〕 42名

今回のツアーでは参加者に北海道東部地域の代表的な野生動物とその生息環境を紹介するため、えりも岬だけでなく、大雪山国立公園内の然別湖においても自然観察会を実施した（図1）。ここではえりも岬におけるゼニガタアザラシの観察会についてのみ報告する。

方 法

中川ら（1987）は、ヒグマ観察会を成功させる条件として、直接観察の方法・技術の確立、観察対象とする動物に与える影響を極力少なくする、参加者の安全確保と指導法の確立の三つをあげている。われわれはこの三条件を参考にし、以下の理由でツアー開催地としてえりも岬を選んだ。

1. ゼニガタアザラシは一年を通して上陸岩礁周辺に生息する。このため周年観察が可能である。えりも岬は約180頭のアザラシが生息する日本最大の生息地（伊藤・宿野部，1986）であり、他生息地よりも観察が容易である。

2. えりも岬では観察地点と上陸岩礁が400～1300mの距離にあり、アザラシに影響を与えずに

観察することができる。その反面、詳細な行動・形態についての観察は困難である。しかし、この欠点は、飼育下のアザラシを観察することにより補うことができる。

3. えりも岬における過去の観察会により、観察技術・指導法が確立されている（ゼニガタアザラシ研究グループ、1986、1987）。

4. 1972年以來の生息数調査、各種生態調査など（和田ら、1986）により、えりも岬においても、ゼニガタアザラシの生物学的情報が蓄積されている。

5. えりも岬におけるゼニガタアザラシの秋ザケ定置網漁への被害の実体は、漁業被害調査によって明らかになっている（棚橋、伊藤1986、ゼニガタアザラシ研究グループ、1986）。漁業被害問題は、ツアー参加者が野生動物と人間の共存について考える一つのテーマとなる可能性がある。

6. 生息数調査・漁業被害調査を実施してきた過去の経過から、地元漁業者とツアー参加者の交流が可能である。この交流により参加者はゼニガタアザラシと地元住民の関係について知ることができる。

7. えりも岬における観察地点は断崖に囲まれているが、国定公園園地整備計画により、遊歩道・防護柵が整備されているため、観察に伴う危険はない。

また、下記の理由により、ツアーの実施時期を9月中旬とした。

1. えりも岬周辺海域は暖流と寒流の影響のため、春から夏にかけて濃霧が発生する日が多いが、秋から冬にかけては霧の発生する日が少なく、ゼニガタアザラシの観察に適している。

2. 秋ザケ定置網漁は9月上旬から12月上旬にかけておこなわれ、この期間にゼニガタアザラシによる被害が発生する。

今回のツアーでは前述の三項目を自然教育資源として活用するため下記の方法を用いた。

1. パンフレットの製作と利用法

今回、自然教育資源として用いる上記三項目の詳しい情報を一冊のパンフレットにまとめた。このパンフレットは移動に用いた大型貸切りバス内で、参加者に配布した。バス内ではスタッフ（ゼニガタアザラシ研究グループのメンバー）4名が、パンフレットを用いた解説や、質疑応答をおこな

った。このパンフレットは、参加者の事後学習にも利用された。

2. ゼニガタアザラシの生物学的情報の活用

ゼニガタアザラシの生物学的情報に関する解説は、移動中のバス・水族館・えりも岬にておこなった。移動のバス内では、参加者とゼニガタアザラシとの出会いを大切にするため、あえて詳しい説明はおこなわなかった。質問にはスタッフが対応した。

シーサイドパーク広尾水族館では、自然環境下では観察困難な“泳ぎ方”“しぐさ”“形態”などについて、飼育下のアザラシを観察しながらスタッフ8名が解説した。

えりも岬では参加者を5～6名の少人数の6班に分けて各班1人ずつスタッフがつき、駐車場から観察地点へ誘導した（図2）。2ヶ所の観察地点では6名のスタッフがあらかじめ20倍および40倍の望遠鏡などを準備しており、12名のスタッフ全員でゼニガタアザラシの発見に努め、観察方法・生態などを解説した。

3. 漁業被害問題に代表される人間とアザラシの間に生じるトラブルの活用

漁業被害はゼニガタアザラシの生息する地域住民にとって大きな問題である。漁業被害の現状を知り、地元における人間とアザラシの関係をすることは、ゼニガタアザラシの保護管理をすすめるうえで極めて重要である。そこで今回、懇談会・親睦会・港における漁業被害の現状視察をおこなった。

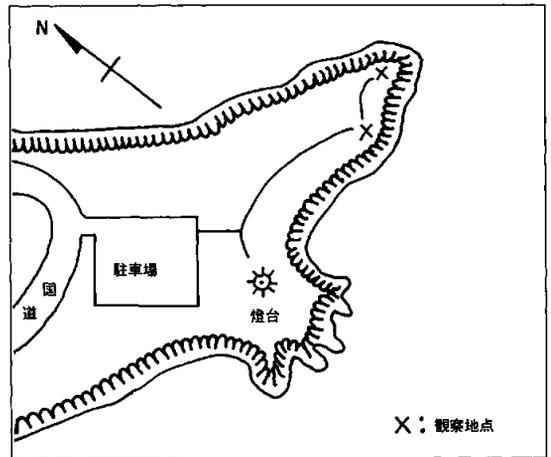


図2. えりも岬におけるゼニガタアザラシの観察地点

懇談会では、地元漁業関係者・町行政者・地元観光関係者などの同席のもと、スタッフによるゼニガタアザラシと漁業についてのスライド上映、地元漁師銅谷氏の“えりも岬の漁業”と題する講演の後、質疑応答がなされた。引き続き親睦会を開催し、参加者と地元住民の自由な討論をおこなった。この際スタッフ12名は分散し、参加者と地元住民の交流に参加した。

また、ゼニガタアザラシの秋ザケ定置網における漁業被害の現状を参加者に知ってもらうために、漁港において秋ザケの水揚げを視察した。スタッフ12名は、サケの水揚げ作業の迷惑にならないよう、参加者を誘導した。水揚げされたサケの中にはアザラシによって傷つけられたと言われるものが混獲されており、漁業被害を視覚的にとらえやすい。

4. ゼニガタアザラシの生息する地域の自然環境と人々の営みの活用法

ゼニガタアザラシの生息する地域の自然環境、人々と営みを知ることは、地元住民のアザラシに対する考え方を理解する手助けとなる。今回、特にこれらを解説する場を設けなかった。しかし、移動バスの中・観察会と機会をみつけては、オオセグロカモメなどの鳥類・草花・気象・海流などの自然環境、コンブ漁やウニ漁などの漁業について紹介した。また懇談会・親睦会において、地元住民と参加者の交流をはかった。

ツアーの成果および反省点を把握するために、ツアー終了時、簡単なアンケート調査を実施した。

結果

参加者を募集したところ、問い合わせは約120件あり、定員を当初予定の25名から42名に増員した。参加者は東京を中心に、長野・大阪・福岡など全国各地から集った。

1. ゼニガタアザラシの生物学的情報の活用

水族館で飼育されているアザラシの観察は、参加者にアザラシという哺乳動物に対する理解と興味を持たせることができた。

えりも岬での自然環境下のアザラシの観察は、初日、二日目の2回実施された。初日、二日目共に、台風の影響により、上陸岩礁が高波にあらわれ、上陸個体を確認できなかった。しかし、両日共、観察地点から約1 km沖合の岩礁近くに、遊泳中のアザラシ約20頭を常時確認することができた。また、時おり観察地点から約80mの海域に、荒波の中を遊泳するアザラシを観察できた(図3)。参加者は、大自然の荒波の中をたくましく泳ぐアザラシに、飼育下の個体観察では味わえない感動を覚えた(図4)。二日目の観察は、後述する懇談会・親睦会・漁業被害の視察の後におこなわれた。このため、参加者は、アザラシを初日とは異なった視点でとらえ、単にアザラシの姿や行動を見るだけでなく、彼らの生息環境をふまえて観察する

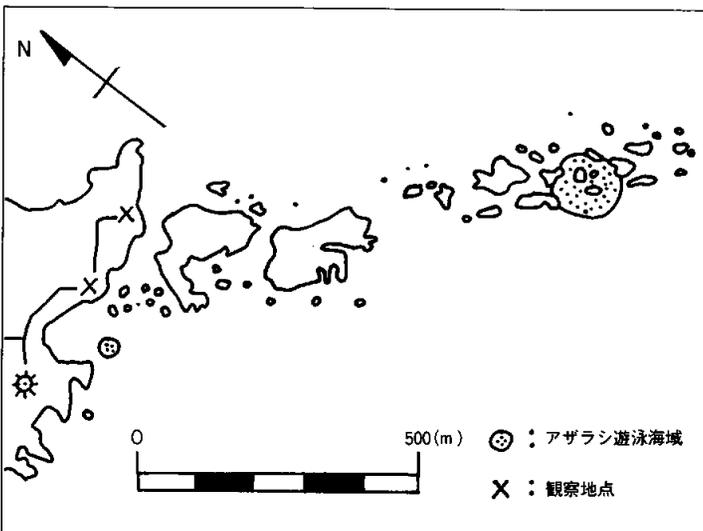


図3. ウォッチングツアーの際のゼニガタアザラシの遊泳海域



図4. 観察風景

ことができた。

2. 漁業被害に代表されるアザラシと人間のトラブルの活用

懇談会・親睦会をとおして、参加者と地元住民、特に漁業関係者との交流があり、アザラシに対するお互いの意見を交換した。参加者の中には、実際に漁業被害を受けている地元漁業者の声を聞き、野生動物の保護管理の難しさを改めて認識した人も多かった。漁業被害の視察では、傷ついたサケを見ながらも、被害という概念に疑問を持つ参加者もいた。

3. ゼニガタアザラシの生息する地域の自然環境と人々の営み

今回のツアーでは、単にゼニガタアザラシのみを観察するのではなく、まわりの自然環境、人々の営み、ゼニガタアザラシと人間の関係など、広い視野にたち、えりも岬の総合的な自然環境におけるゼニガタアザラシの存在を観察することができた。「ゼニガタアザラシだけでなく、地元の人々の生活にふれることができてよかった。」とアンケートに答えた参加者もいた。

考 察

今回の“ゼニガタアザラシウォッチングツアー”の目的は、①ゼニガタアザラシの生物学的情報、②漁業被害に代表される人間とアザラシの間に生じるトラブル、③アザラシの生息する地域の自然環境と人々の営み、の三項目を自然教育資源として活用することであった。

観察という言葉の意味は、本来、相手をありのままに見る（青柳, 1984）ということである。われわれは野生動物を観察する場合、対象とする動物だけでなく、その生息する環境・人間とのかかわりあいについて総合的に把握する必要があると考えている。

アンケートの回答には、「普段意識していないことを目のあたりに問題として投げかけられ、自分の内にある「自然観」を改めさせられた。」「自然を守っていくということの参考になり有意義であった。」「これを機会にもう少し積極的な自然保護運動をやっていきたい。」などの意見が多数含まれた。

これは、ツアー参加者が単にゼニガタアザラシのみを観察するのではなく、その生息環境・人間

とのかかわりあいを、知識だけでなく体験として受け入れたことをもの語っている。

このことから、今回のツアーが単なる野生動物の観察会ではなく、上記三項目を活用した自然教育的意義のある企画であったといえるだろう。

また、その要因として、上記三項目の詳細な解説と観察指導、および、地元住民の積極的参加があげられる。

上記三項目の詳細な解説と観察指導は、アザラシの生態と彼らをとるまく状況についての専門的な知識・観察などの具体的な体験を参加者に与え、参加者の自然観を刺激するのに有効であった。

次に、地元住民の積極的参加は、漁業被害を受けている漁業者の感情、えりも岬の自然と人々の営みを、参加者が理解するのに不可欠であった。

上記三項目を自然教育資源としてとらえたツアーや観察会の実施は、アザラシの観察が容易であり、地元住民の理解と協力の得られるえりも岬が最適地である。また実施は、天候と漁業被害の発生する時期を考慮すると今回同様9月中旬が適している。

今回のツアーの注目すべき点は、ゼニガタアザラシによって被害を受けている漁業関係者の積極的参加があったことである。なぜなら、今までゼニガタアザラシを害獣としてみなしてきた漁業者が、ゼニガタアザラシを漁業者としての立場だけでとらえるのではなく、地域全体の問題としてとらえ始めたと考えられるからである。

加えて言うならば、地元漁業者・町行政者・観光業者など地元住民にとって、懇談会・親睦会におけるツアー参加者との交流は、ゼニガタアザラシの保護管理問題を、えりも町内の狭い視野ではなく、全国的な視野にたつととらえるきっかけとなった可能性がある。

今回のツアーはゼニガタアザラシの保護管理について、地元住民との相互理解を得るための第一歩であったと言える。

おわりに

ゼニガタアザラシと漁業の共存を考える場合、漁業被害は避けることのできない問題である。被害＝害獣＝駆除という短絡的な考えではなく、漁業被害の防止、被害補償の対策を探りながら共存の方法を考えるべきである（羽山, 1985）。

今回のような海獣類の観察ツアーは、わが国では数少ない試みであるが、欧米諸国ではクジラやアザラシの観察がさかんであり、観光業に貢献している場合も少なくない。

例えば、マサチューセツのプロヴィンストンではクジラを観察することが一つの産業として成立している (Maddoxi, 1984)。ここでは小規模であるが、民間で船を運搬し、クジラの研究者と共同体制をとって会社を運営している。またカリフォルニアのアノ・ヌエボでは、キタゾウアザラシを自然教育の資源として利用している (Le Boeuf et al, 1980)。週一回10週間の講義、3回の実習によってアノ・ヌエボの自然史に関する専門知識を身につけた Docent (専門知識のあるボランティアの案内人) が、パークレインジャーを手伝い、キタゾウアザラシのガイドをおこなっている。ガイド参加希望者は、あらかじめ希望の日時を電話予約し、ビジターセンターに集合する。Docent は1グループ約20人を担当し、約90分かけ、キタゾウアザラシの上陸場を周り、アザラシやアノ・ヌエボの自然史について解説している。このガイドは、アノ・ヌエボ案内協会に登録されている225名の Docent により、キタゾウアザラシの繁殖期である12月中旬から4月中旬の長期間にわたっておこなわれている。この間約10万人の訪門者があり、キタゾウアザラシなどの知識を得、各自の自然観を豊かにしている。

諸外国では、このように野生動物をありのままに、その生息環境において自然教育・観光などに有効に活用している。今回のツアーでは、特に漁業被害一地元漁業者にとってマイナスな面を、逆に自然教育の資源として活用した。

今後、今回同様のツアーや観察会を、さらに充実し、定着させれば、それが、ゼニガタアザラシと人間との共存、ひいては地域の活性化に結びついていくと考えられる。

参考文献

- 青柳昌宏 (編)、1984: 自然観察ハンドブック。421pp. 思索社
- Burney J. Le Boeuf. Roger Werts. Jenny Anderson. and Stephanie Kaze 1980. Interpreting Año Nuevo.
- 羽山伸一. 1985: ゼニガタアザラシ保護・管理のモデルケースとして一. 哺乳類科学, 50:31-41.
- 伊藤徹魯. 宿野部猛. 1986: ゼニガタアザラシの生息数と生息状況. ゼニガタアザラシの生態と保護: 18-58. 東海大学出版会
- Maddox, J. 1984: Conservation goes, Nature 310:54
- 中川 元. 山中正実. 森 信也. 成清美智代. 田沢道広. 1987: 知床半島で実施したヒグマの観察会について. 知床博物館研究報告8:49-54
- Shaughnessy D.P. and F.H.Fay, 1977: A review of the taxonomy and nomenclature of North Pacific harbour Seals. J. Zool., Lond. 182: 385-419
- 棚橋恵子・伊藤徹魯. 1986: 襟裳岬の秋ザケ定置網漁業におけるゼニガタアザラシの被害について. ゼニガタアザラシの生態と保護: 257-273 東海大学出版会
- 和田一雄・伊藤徹魯・新妻昭夫・羽山伸一・鈴木正嗣. (編) 1986: ゼニガタアザラシの生態と保護. 418pp 東海大学出版会
- ゼニガタアザラシ研究グループ. 1986: 北海道沿岸に生息するアザラシ類の保護管理に関する研究、特にゼニガタアザラシを中心として. 122 pp. トヨタ財団1985年度研究助成調査報告書
- 1987: 北海道沿岸に生息するアザラシ類の保護管理に関する研究およびその自然教育への応用. 142pp. トヨタ財団1986年度研究助成調査報告書

A Trial of Kuril Seal watching tour in 1987, Hokkaido.

T. Nakaoka, K. Nagata, S. Ishikawa, Y. Ikegami.